

# 国際バカロレア教育の理念と手法の活用

～2022年度第1回FD研修から～

Effective Use of the Educational Philosophy and Teaching Methods  
of the International Baccalaureate Education

— Report on the First Faculty Development in 2022 —

米村 珠子

YONEMURA Tamako

## 1. はじめに

2022年12月5日(月)、教職課程センターの2022年度第1回FD研修(以下「本研修」という。)において、東京都立国際高等学校の青木一真指導教諭を講師に迎え「国際バカロレア教育の理念と手法の活用」と題して特別講義を実施した。本研修は本学教職課程を履修する4年次後学期必修科目である「教職実践演習」の授業時間に実施し、教職課程センターの教職員及び学生計38名が参加した。

本稿では、本研修で紹介された国際バカロレア教育の概要を再構成して詳述し、学生の振り返りを共有するとともに、講義で扱われたCALP(Cognitive Academic Language Proficiency, 認知学問言語能力)を教科指導にどうつなげていくかについて参加学生が行ったグループ演習と演習を通して得た学びの成果を考察し報告する。

## 2. FD研修の概要

### (1) 研修のねらい

文部科学省がグローバル人材育成の観点から普及・拡大を推進している国際バカロレア(以下

「IB」という。)教育について、日本の中等教育におけるIB教育の実態や、IB教育の理念や手法を理解するとともに、教科指導における活用について学ぶ。

### (2) 対象

教職課程センター運営委員、教職実践演習履修学生(外国語学部4年生)

### (3) 期日及び実施場所

2022年12月5日(月)16:20～17:50 明海大学  
浦安キャンパス 講義棟2201 講義室

### (4) 講師

青木 一真氏

東京都立国際高等学校指導教諭、IBDP(ディプロマ・プログラム)コーディネーター、文部科学省IB教育推進コンソーシアムAir Campus実行委員・関係者協議会委員

### (5) 演題及び講義内容

「国際バカロレア教育の理念と手法の活用」

- ・IB教育の基礎知識
- ・日本の中等教育におけるIB教育の実態及び東

京都立国際高等学校における実践

- ・理論：CALP を意識した IB 教育における教科指導の例
- ・演習：CALP の教育手法としての活用について考える

### 3. 国際バカロレアの概要と受講後の振り返り

#### 3.1 国際バカロレア教育の目的と使命

本研修の前半で紹介された国際バカロレアの概要に補足する基本知識をここで示す。

国際バカロレアとは、スイス、ジュネーブに本部を置く国際バカロレア機構が提供する国際的な教育プログラムである。1968年、チャレンジに満ちた総合的な教育プログラムとして、国際的に通用する大学入学資格を与え、大学進学へのルートを確保することを目的として設置された<sup>1</sup>。

IB プログラムは、「児童生徒が自身のまわりの世界のもつ複雑性を理解し、未来のために責任ある行動をとるために必要なスキルと性質を身につけられるような教育を提供する」<sup>2</sup>ことを目指して、次の3つの使命を掲げている。

Mission Statement (Our Mission)

The International Baccalaureate® aims to develop inquiring, knowledgeable and caring young people who help to create a better and more peaceful world through intercultural understanding and respect.

To this end the organization works with schools, governments and international organizations to develop challenging programmes of international education and rigorous assessment.

These programmes encourage students across the world to become active,

compassionate and lifelong learners who understand that other people, with their differences, can also be right.<sup>3</sup>

IB の使命

国際バカロレア (IB) は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。

この目的のため、IB は、学校や政府、国際機関と協力しながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいます。

IB のプログラムは、世界各地で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけています<sup>1</sup>。

#### 3.2 IB プログラムについて

IB 教育では、グローバル化に対応できるスキルを身につけた人材を育成するため、生徒の年齢に応じて、4種類の教育プログラムを提供している<sup>1</sup>。4つのプログラムは全て、国際的な視野とIBの学習者像(後述)を育むという共通の目標で支えられ、それぞれ独自の特徴と発達段階に適した内容で構成されている<sup>2</sup>。

##### (1) PYP (Primary Years Programme)

3歳から12歳までを対象として、精神と身体の両方を発達させることを重視したプログラムで、どのような言語でも提供が可能である。

##### (2) MYP (Middle Years Programme)

11歳から16歳までを対象として、青少年に、こ

れまでの学習と社会のつながりを学ばせるプログラムで、どのような言語でも提供が可能である。

### (3) DP (Diploma Programme)

16歳から19歳までを対象としたプログラムで、所定のカリキュラムを2年間履修し、最終試験を経て所定の成績を取めると、国際的に認められる大学入学資格（国際バカロレア資格）が取得可能である。原則として、英語、フランス語又はスペイン語で実施する。

### (4) CP (Career-related Programme)

16歳から19歳までを対象として、生涯のキャリア形成に役立つスキルの習得を重視したキャリア教育・職業教育に関連したプログラムである。一部の科目は、英語、フランス語又はスペイン語で実施する<sup>1</sup>。

## 3.3 DP (ディプロマ・プログラム) のカリキュラム

日本では高校2、3年生が対象年齢となるディプロマ・プログラムは、下のようなカリキュラム構成になっており、それぞれのグループから、上級レベル (Higher Level) 3科目、標準レベル (Standard Level) 3科目を選択して履修する。また、「コア科目」と呼ばれる3種類の科目の履修が必須となっている。公立学校をはじめとする学校教育法第1条に規定されているIB認定校では、学習指導要領で定める教科・科目等の内容とIBが定めるカリキュラムの双方を履修・習得させる必要があるため、科目を読み替えたり教育課程の特例を申請したりするなど工夫して教育課程を編成・実施することが求められる。

〈DPのカリキュラム例〉

グループ1 (言語と文学) : 日本語 A, 文学, 英語 A, 言語と文学 など  
 グループ2 (言語習得) : 日本語 B, 英語 B など

グループ3 (個人と社会) : 歴史, 地理, 経済 など  
 グループ4 (理科) : 物理, 生物, 化学 など  
 グループ5 (数学) : 数学 (解析とアプローチ), 数学 (応用と解釈)

グループ6 (芸術) : 音楽, 美術, 演劇 など

※グループ3又は4からもう1科目選択で代替可能  
 コア科目 : 課題論文 (EE; Extended Essay), 知の理論 (TOK; Theory of Knowledge), 創造性・活動・奉仕 (CAS; Creativity, Action, Service)

最終的にIBディプロマ資格を得るためには、厳格な授業時間数のカウントを含むカリキュラム上の履修・習得要件を満たした上で、世界共通試験で合格基準に達することが必要となる。

## 3.4 IBの学習者像 (The IB Learner Profile)

「IBの学習者像」は、上記3.1で示した「IBの使命」を具体化したもので、「国際的な視野をもつとはどういうことか」という問いに対するIBの答えの中核を担っており、IB認定校が価値を置く人間性を表している<sup>1</sup>。

文部科学省は、平成29(2017)年に「国際バカロレアを中心としたグローバル人材育成を考える有識者会議」を設置し、その取りまとめの中で、IBの理念及び教育カリキュラムと日本の教育政策の方向性は親和性が高いことを示したが、学習指導要領改訂の方向性である「主体的・対話的で深い学び」や育成すべき人材の具体像がこの学習者像に表されていることが分かる。

次に示すのが、IBが示しているIBの学習者像、10の人物像である<sup>2,4</sup>。

探究する人 (Inquirers)  
 心を開く人 (Open-minded)  
 知識のある人 (Knowledgeable)  
 思いやりのある人 (Caring)

- 考える人 (Thinkers)
- 挑戦する人 (Risk-takers)
- コミュニケーションができる人 (Communicators)
- バランスのとれた人 (Balanced)
- 信念をもつ人 (Principled)
- 振り返りができる人 (Reflective)

※ ( ) 内は筆者による分類

### 3.5 日本の中等教育における IB 教育の実態と実践

IB 機構によると、2023 年 1 月時点で世界 159 以上の国・地域において約 5,600 校が IB 認定校として IB 教育プログラムを提供している。

日本における IB 教育は、「日本再興戦略」(平成 25 年 6 月)において「一部日本語による国際バカロレアの教育プログラムの開発・導入等を通じ、国際バカロレア認定校等の大幅な増加を目指す(2018 年までに 200 校)」<sup>5</sup> 政策により推進されている。国内の IB 認定校及び認定申請中の候補校は表 1 の通り 191 校である<sup>2</sup>。

表 1 国内の IB 認定校等数 (2022 年 12 月 31 日時点)

種類	認定校	候補校
PYP	59	21
MYP	34	8
DP	66	3

※上記は学校・プログラム単位で数えたもので、IB 機構が公表している校数とは異なる。

※学校教育法第 1 条に規定されている学校は 72 校、日本語 DP 実施校は 33 校

### 3.6 IB 教育についての学生の理解と振り返り

今回の FD 研修に際して、参加学生に受講前の理解を問うため IB についての知識の有無をワークシートに記入させたところ、IB について知っている者はいなかったが、多くの学生が講義を通して IB 教育の仕組みや大学進学資格の取得やカリキュラムの概要だけでなく、その教育理念や教育方法について理解を深めることができたことが、次の振り返りの記述からも分かる。

【受講後に IB について理解が深まったこと、特に印象に残った内容】

- ・ IB のプログラムは、世界各地で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけている。(教育理念)
- ・ IB は、多様性を尊重した生涯学習で、国語・英語から芸術まで幅広く学ぶ。論文やエッセイにも取り組み、自ら考える力が身につけられる。(カリキュラム)
- ・「知の理論」について、常識を疑うという点で今の時代に必要な力であると思った。また、どこまでシンプルにしたら要点を失わずに説明できるのかという考え方も面白いと思った。(コア科目)
- ・ (知の理論について) 今ある知識を疑い議論するということが印象に残った。疑いをもつために様々な知識が必要になる。(コア科目)

## 4. CALP の活用

次に、本研修の後半で扱われた CALP について先行研究を参考に簡単に触れた上で、紹介された IB における教科指導例と、学生が行った演習及びその振り返りについて記す。

### 4.1 IB の言語と CALP について

IB の使用言語 (working language) は、英語、フランス語、スペイン語である。また、IB 教育プログラムのうち、DP (Diploma Programme) と CP (Career-related Programme) のプログラム実施言語は、原則としてこの 3 つの言語である<sup>6</sup>。IB

教育では、「児童生徒を複数の言語に熟達し読み書きにも優れた知識豊富な多言語話者に育てることを可能にする」ため、「言語」と「学習」については、IBの『プログラムの基準と実施要綱』<sup>7</sup>に明確な基準が示されている。例えば、IB機構からIB教育プログラムを実施する学校として認定を受けたIBワールド・スクールは、言語学習を重視することやIBが求める言語方針に合致した言語方針を策定し実施することなどが求められる。

IB教育が重視している多言語主義や言語学習の方針を踏まえて、IBでは2019年からCALP (Cognitive Academic Language Proficiency, 認知学習言語運用能力) (Cummins 1979) をIBプログラムの教科学習に導入することになった。

「言語の学習」に重点が置かれる基本的対人伝達能力 (BICS; Basic Interpersonal Communicative Skills) (Cummins 1979) は、人格的な成長や文化的アイデンティティの構築、多様な文化の理解にとって重要な要素であり、社会的相互作用に関わる能力である<sup>6</sup>。他方、BICSに対してCALPは「言語を通じた学習」に重点を置くもので、IBプログ

ラムガイドにおいても「学校教育でやがて必要となる、文脈に基づかない抽象的な言語表現に求められるアカデミックな言語スキル」<sup>6</sup>であることが記されている。

表2は、本研修で青木指導教諭が紹介した、IBが示している経済におけるCALPの枠組みである。

本研修では、後述する通りこの枠組みを使用して学生による演習を行った。

#### 4.2 CALPを意識したIB教育における教科指導例

本研修の講師である青木指導教諭が講義で述べたように、CALPはIB教育においてまだ新しい実践であるため、IB機構から発表されている指導事例は、本研修実施現在でDP経済とDP数学のみである<sup>8</sup>。青木指導教諭からは、具体的なCALPによる指導事例が2種類紹介された。表3は、DP経済の指導ガイドに掲載されている指導事例 (日本語訳) であり、表4は、青木指導教諭が実践したDP歴史上級レベルでの指導事例である。

表2 A framework for planning CALP development<sup>8</sup>

Cognitive Academic Language Proficiency skills ↓	Pedagogy →			
	Activating background knowledge	Scaffolding for new learning input	Acquisition of new learning through practice	Demonstrating proficiency
Listening				
Speaking				
Interacting				
Reading				
Writing				
Command terms and thinking skills				

出典：International Baccalaureate. (2020). "Economics teacher support material First assessment 2022". p. 30

表3 CALPによる指導事例(DP経済)<sup>9</sup>

	既習知識の活性化	新しい知識への足場づくり	実践を通じた新知識の獲得	知識の発揮
聞く	例1	例2		
話す				
双方向				
読む			例3	例4
書く				

- ・例1：生徒は既習事項の用語やイメージの資料を見て知識を確認する。
- ・例2：生徒は「政府が経済に与える影響」などの事例が掲載されている資料を見て考えを共有する。
- ・例3：生徒は実際の国を事例に取り上げ、新聞記事やデータを入手し、レポートを作成する。
- ・例4：生徒は「経済活動をどのように測ることができるか」について、具体的な国を事例に取り上げ調査し、イラスト化し、発表する。

表4 CALPによる指導事例(DP歴史Higher Level)<sup>9</sup>

	既習知識の活性化	新しい知識への足場づくり	実践を通じた新知識の獲得	知識の発揮
聞く	例1	例3		
話す				
双方向				
読む	例2	例4	例5	例6
書く				

- ・例1：生徒は既習事項に関するEdx等のオンライン講義を聞き、教師の発問に従って内容を共有する。
- ・例2：生徒は既習事項に関する教科書等の該当ページを読み、まとめを記入する。
- ・例3：生徒は新単元に関するEdx等のオンライン講義を聞き、教師の発問に従って内容を共有する。
- ・例4：生徒は新単元に関する教科書等の該当ページを読み、まとめを記入する。
- ・例5：生徒は新単元に関する、教師のディベート質問に対し、ペアやグループで協力しながら回答をする。
- ・例6：例5の解答を振り返り、最終的に個人で単元を通した問に対して論述する(定期考査)。

### 4.3 演習：CALPによる指導事例を考える

ここでは、本研修参加学生による演習の結果と振り返りについて述べる。

研修参加者は、青木指導教諭による講義を通してIBの教育理念や方法について知識を得るとともに、それらに基づくCALPを活用した実践事例について

理解を深めた。その学びの成果として実際に一つの課題を通して教科指導事例を考える演習を行った。この演習における生徒の学習到達目標は表5の右下部分の「書くことによる知識の発揮」で、最終的なアウトプットのためにどのような指導過程・学習活動が考えられるか、学生は3人又は4人のグループに分かれて協議を行った後、代表者が発表した。

表5 CALPによる指導<sup>9</sup>

※太罫線は筆者による

	既習知識の活性化	新しい知識への足場づくり	実践を通じた新知識の獲得	知識の発揮
聞く				
話す				
双方向				
読む				
書く				

(1) IB 科目「言語 A：文学」を想定した課題

- ① 課題：少なくとも 3 つの時代からそれぞれ 1 つの作品を選び、分析批評を行う
- ② 演習結果例（学習活動，メリット等）
  - ア 『源氏物語』『平家物語』『ころも』
    - ・作品について知っている知識を伝え合って共有し、自殺が与える影響や時代背景、主人公の心境の変化について考える
    - ・このアプローチが文学の入口になる。文字の違いを知る、新しい視点をもてる
  - イ 『万葉集』『枕草子』『坊ちゃん』
    - ・同じ言葉での表現の違いや共通事項を考える
    - ・内容理解から一歩先に進んだ学びが得られる
  - ウ 鎌倉時代，平安時代，江戸時代の歌人の作品の比較
    - ・それぞれの時代の生活や文化について論じる
  - エ 『ちいちゃんのかげおくり』『ごんぎつね』『ころも』
    - ・命の大切さや生きていきたいという気持ちについて考えさせる

上記の他、「3つの時代から」という条件に合致していないが、グループワークで出てきたものは次の 2 件である。

- オ 『イエスマン』『ハングオーバー』『ドラえもん』作品
  - ・一般的に愚かだと思われる主人公を、個性やユニークさの視点からとらえ直す
- カ ディズニー作品、『アベンジャーズ』、ジブリ作品など
  - ・作品の普遍性を考える、対等に比較してみる

(2) IB 科目「言語と文学」を想定した課題

- ① 課題：他大学の広報用ポスターを分析し、本学のポスターを考える
- ② 演習結果例（学習活動，メリット等）
  - ア 明海大学のポスター（海に立つ女子学生編）
    - ・男子でなく女子学生が出ていること、海の中に立っている意味、太陽の位置などについて分析し論じる
    - ・ポスターについて考えることは伝える力の伸長につながる
  - イ 『ちいかわちゃん』の活用
    - ・「ちいかわちゃん」の作品に出てくる「…」(言葉になっていない言葉)を考察し、自分ならどのようなセリフを言わせるか、それによって何を感じられるかについて考える

4.4 CALP を意識した演習での学び

— 学生の振り返り —

上記の演習においてグループで話し合ったことや考えたことについて、振り返りシートに学生が記入した内容の一部を掲載する。演習を通して、学びの最終ゴールが知識の発揮（アウトプット）であることの意義や、教育的な効果と活用の広がりなど、CALP を意識した指導に向けて気づきや発見があったことが分かる。

【CALP の教育手法としての活用法やメリットについて話し合ったこと、考えたこと】

- ・時代背景やその時代の文体なども深堀すると知ることができる。1つの視点からではなく、色々な角度から物事を見ることができる。グループワークをしたらよりたくさんの考えを知り、お互いにとってよい刺激になる。

- ・授業でやったこと以外の所も学ぶことができるので、より興味・関心が引き出され、自ら進んで学べるようになると思う。
- ・3つの作品を同時に扱うことによって、時代による書き方の違いから言語を知ることができる。
- ・時代によって文法が変わり、文法によって表現や意味が異なる。現代においても作品が書かれた当時に表現したかった通りに解釈しているかどうか疑問である。
- ・共通点や相違点を自分や人と見つけ、深めることで、文学をより深堀することができることから、文学について学ぶことが楽しくなると思った。(IBは)生きていく上での力を育てる教育であると思う。
- ・古典を古典として扱わないようにすることによって、古典への苦手意識をなくしていくことができるのではないか。
- ・どんな文学でも何か普遍的要素を含んでいて、どんな方法でそれらを結び付けて考えさせるのか、ということを考えるのは、アイデアがたくさん出て面白かった。
- ・内容について1つの答えを求めるのではなく、どのように活用できるようになるかを意識するようになる。
- ・1つの内容や作品で設定した目標の達成のための指導を考えるのではなく、いくつかの作品の情報を紹介することで、それらの普遍的な内容から学べることを設定する方が、生徒の学びにとって生産性のある授業になる。
- ・具体的に最終的に何を行うかを決め、それに対しどのようなデザインをすればよいかを考える手法である。3つの時代から作品を選び、分析批評を行うことは面白いと思った。また、自分が思いついて疑問点が出て

くると自ら調べたいと思うので、学ぶことが楽しいと感じた。

- ・ポスター1つとっても、生徒全員が同じ感想や印象をもつことはない、ということによって、相手には相手の意見があるということが分かり、世の中の争いごとが減るかもしれないと思った。道徳教育にもなる内容である。
- ・実際にCALPに基づいた教育方法を考えることは難しいと感じたが、共通点を探して、それらを活用していく工夫や、国際社会に通用する視点を広げることを意識して演習の課題を考えた。

#### 4.5 CALPの理論についての学び

##### — 学生の振り返り —

上記に併せて、CALPの理論について学んだことの振り返りの一部を紹介する。特に、既習知識を活性化させて新しい知識への足場づくりをすること、実践を通じて新しい知識を得て最終的に知識を発揮するアウトプットが重要である点について理解が深まったことは、本研修の成果であるといえる。

##### 【CALPの理論について理解が深まったこと】

- ・論理的な思考に着目して教育しているが、抽象的で枠にはまらない知識にも着目している。
- ・今までの授業と異なり、内容を理解するのではなく、知っていることを基にそれまでとは違う視点から物事を考えることは新鮮である。
- ・文字や文章などに着目して考えることは、多角的に物事を見る力を養うことができると思った。

- ・何事にも最終目的から逆算して考えることは必要であると思う。課題を解決していく中でこのことには気を付けたい。
- ・様々な視点から物事を考えるだけでなく、自分だったらこんな発想ができる、こんな工夫ができる、などの発展をさせて、より物事への理解を深める活動であることが分かった。

- ・生徒の4技能をより活性化させるために、知識を身につけるだけでなく、実践的に取り組む工夫がたくさんあり、生徒の理解のためにとっても特化されていることを実感した。

#### 【CALPの理論について特に印象に残った内容】

- ・既習知識を活性化し、新しい知識への足場づくりをして実践を通じた新知識を獲得する。そして知識を発揮するまでの過程で、「聞く」「話す」「双方向」「読む」「書く」の順番に指導される。
- ・知識の発揮に向けて学習を設計していく。最終的に求められるアウトプットに向けて考えていく。
- ・何が求められるアウトプットかをスタートにおいて考える。論じることがゴールである。
- ・生徒に何が求められているかを考えて指導する。生徒が活動する時間と教員が話す時間の組み合わせや配分をどうするかを設計することが必要である。
- ・最終的に目指す、求められるアウトプットは何かを考える。それに向けてどのような活動ができるかを考える。

## 5. まとめ

本研修を通して、ほとんどの参加者がそれまで全く知らなかったIB教育についてその理念や手法を

理解しただけでなく、CALPという新しい枠組みを実践的に学ぶことができたことが、今回の成果である。具体的には3つの成果が考えられる。

1つは、教科指導が知識や情報を与えることに偏重することのないよう、知識や情報をどのように活用するかという主体的な取組・学びの視点が得られたことである。次に、児童生徒に対して、知識の有無や正解・不正解を問うのではなく、正解のない問いや課題に取り組ませることで深い学びにつながることに、最終的なゴールは知識の発揮というアウトプットにあるということが分かったことである。そして、グループワークでの演習（協働学習）を行ったことにより、構成員の様々なアイデアや意見を共有し、自分たちの考えを発展させたり新たな価値を創造したりすることにより、対話的な学びが実現したことである。

今後とも、指導者である教員はもちろんのこと、教職を目指す学生たちが学ぶ過程においても、CALPの枠組みを活用して、主体的・対話的で深い学びを実現させるスキルを身につけ、より一層高めていくことに期待したい。

#### 引用文献等

- 1 文部科学省IB教育推進コンソーシアム. “IBとは”. “日本におけるIB教育”. <https://ibconsortium.mext.go.jp/about-ib/>, (参照 2023-01-08)
- 2 International Baccalaureate. (2017). “国際バカロレア (IB) の教育とは?”. <https://www.ibo.org/globalassets/new-structure/brochures-and-infographics/pdfs/what-is-an-ib-education-2017-jp.pdf>
- 3 International Baccalaureate. “Our Mission”. <https://ibo.org/about-the-ib/mission/>, (参照 2023-01-08)
- 4 International Baccalaureate. “The IB learner profile”. <https://ibo.org/benefits/learner-profile/>, (参照 2023-01-08)
- 5 国際バカロレアを中心としたグローバル人材育成を考える有識者会議. (2019). “中間取りまとめの概要”. [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/ib/1326221.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/1326221.htm)

- 6 International Baccalaureate. (2014). “IB プログラムにおける「言語」と「学習」”.  
<https://www.ibo.org/globalassets/new-structure/benefits/pdfs/language-and-learning-in-ib-programmes-jp.pdf>
- 7 International Baccalaureate. (2014). “プログラムの基準と実施要綱”.  
<https://ibo.org/globalassets/new-structure/about-the-ib/pdfs/programme-standards-and-practices-ja.pdf>
- 8 青木一真. (2020). “学習言語習得のメカニズムと他教科への応用 — 国際バカロレア・ディプロマプログラムの実践から” 全国英語研究団体連合会 東京大会 2020 大会レガシー. [\[ren.com/?p=2055\]\(http://www.zen-ei-ren.com/?p=2055\)](http://www.zen-ei-</a></li></ol></div><div data-bbox=)

- 9 青木一真. (2022). “国際バカロレア教育の理念と手法の活用”. 明海大学 2022 年度第 1 回 FD 研修講演資料. 明海大学.

#### 参考文献等

- Cummins, J. (1999). “BICS and CALP: Clarifying the Distinction”. University of Toronto.  
<https://files.eric.ed.gov/fulltext/ED438551.pdf>
- 半田淳子 (編著). (2020). 『国際バカロレア教員になるために』 東京：大修館書店.
- 半田淳子 (編著). (2017). 『国語教師のための国際バカロレア入門』 東京：大修館書店.